

生活科指導計画の調査研究（第1年次）

教育センター学習指導部 山 邊 彰 一

I 研究のねらい

新教科、「生活科」が誕生し、早くも4年の月日が過ぎた。全面実施後、各校では、子供の思いや願いを大切にした授業の実践に取り組んできており、生活科が問題提起している「体験重視」、「個性重視」等の授業が実践されつつあると言える。しかし、一方で地域や学校が異なっているのに、指導内容や活動の進め方が共通化していると危惧されている^{注1}のも事実である。

生活科では、具体的な活動や体験を重視し、子供の自発性、能動性を大切にしながら自立への基礎を養うことをねらいとしている。したがって、子供の発想や願いを大切にし、夢を持たせながら学習するという「子供の立場」からの指導計画が求められている。さらに、子供の生活の場である学校や地域を生かした指導計画の作成が強く求められている。新教科であるからこそ、指導計画の充実が望まれているものと言える。

本研究は昨年度の福島県内各小学校の指導計画がどのように計画、実践されているかを調査し、その結果から今後の指導計画改善の方向性を見い出そうとするものである。

II 研究の計画・内容

平成7年 1年次	・生活科指導計画の基本的な考え方の把握 ・指導計画の調査・考察
平成8年 2年次	・指導計画の調査・考察 ・指導計画改善のポイント検討、まとめ

注1 「四季の生活科」 No.7 天笠茂氏の指摘

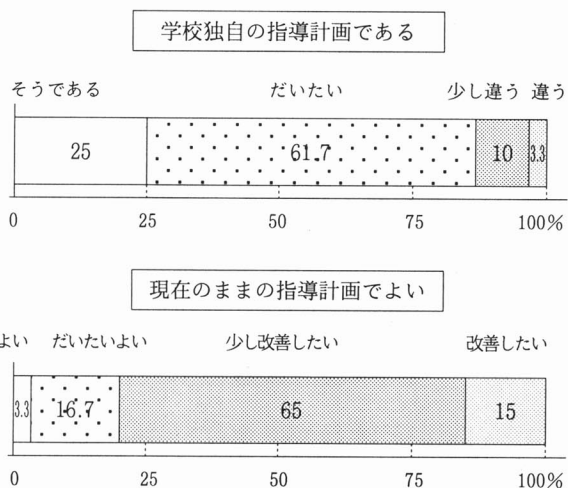
III 調査対象

○ 調査対象校 県内各地区の小学校60校

IV 研究の実際

1 教師のアンケートから

教師は、自校の指導計画に対してどのような意識を持っているのだろうか。次のグラフは昨年度、生活科講座を受講した教師60人に対するアンケートの結果である。



「学校独自の指導計画になっている」と考えている教師は全体の25.0%、「だいたいになっている」と考えている教師と合わせると86.7%である。しかし、「少し改善したい」「改善したい」と考えている教師も80.0%になる。これは、計画が学校独自のものであっても、学級の実態と違っていたり、教師の教材観等に違いがあるためと考えられ、各校の指導計画の形式や活用の仕方等に課題があるものと考えられる。